漢字はすごい！

山口謠司

講談社現代新書

2237

漢字はすごい!

山口謠司

常州大学図書館
藏書章

講談社現代新書
2237

N.D.C. 810　184p　18cm
ISBN978-4-06-288237-8

講談社現代新書　2237
漢字はすごい！
二〇一三年一一月二〇日第一刷発行

著　者　山口謠司　© Youji Yamaguchi 2013
発行者　鈴木　哲
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電　話　出版部　〇三―五三九五―三五二一
販売部　〇三―五三九五―五八一七
業務部　〇三―五三九五―三六一五

装幀者　中島英樹
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定価はカバーに表示してあります　Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉
複写を希望される場合は、日本複製権センター（電話〇三―三四〇一―二三八二）にご連絡ください。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。

目次

はじめに ―― 3

第一章　漢字は千変万化する ―― 11

「漢字」という言葉／「文」と「字」／漢字ができたら鬼が哭いた？／漢方薬からの発見／カクカクの赤い文字／文字は神聖／印鑑のグネグネ文字／竹や木の板に書かれた文字／古代の書物は暗誦するものだった／始皇帝による文字の統一／絹に書かれた書物／偏（ヘン）がつく／紙は漢字の可能性を広げた／書道を習おう／印刷の始まり／文字の霊性／本はみんなにわかる字で／流れ作業で作られた明朝体／科挙が終わってしまう／せめて自分の名前は書こう／漢字の発音／朝鮮半島での漢字の発音／ベトナムでも漢字は使われた／「卓袱」はどこの言葉なのか／漢文は簡単！

第二章　すばらしい漢字のカタチ　65
「六書」という方法／象形／指事／会意／形声／会意形声／仮借／仮借で作られた新しい漢字／転注／もうひとつの転注

第三章　音も変わっていく　87
音節がひとつしかない中国語／アクセントがないとダメ／インドとの遭遇／二字で一字の音を書く／音の種類／韻を踏むから覚えやすい／漢詩は音が美しい／中国語にオノマトペはほとんどないが……／古代人の笑い方／古代音への挑戦／漢字をアルファベットで／古代中国語復元への挑戦

第四章　解釈すれば、あら不思議　113
どのように物をみるのか／思い、邪無し／辟邪という怪獣／「也」「之」は漢字か／布汁大統領／トリゴーと大秦景教流行中国碑／外国語の漢訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　漢字と日本

日本語が書ける／万葉仮名の借音／「借訓」という方法もある／勧学院の雀／〈カタカナ〉の発明／〈ひらがな〉の発明／まだわからない形の〈かな〉／漢字でない漢字／新しい思想／いろは歌と五十音図の原型／吉備真備と〈カタカナ〉／略字がどんどん作られる／遣唐使船に乗らなかった小野篁／小野篁廬字尽／字割りと詰め字／江戸時代はへんな漢字がいっぱい／漢字はいらない！／漢字は日本語を作る原動力／河・江・川／矢野龍渓という奇才／常用の漢字は三千字以下／語感を磨く教養／単位を表す漢字／戦後の漢字制限／世界に誇る漢和辞典

漢字はすごい!

山口謠司

講談社現代新書

2237

はじめに

古代中国の字書『集韻』に「鬮」という漢字がある。
はて、これは、何を意味する漢字なのだろうか。
「鳥」という字が使われているから、トリか、あるいは空を飛ぶものを意味するものであることは想像ができる。
しかし、どんな生き物なんだろうか……。
まさかこれが、「モモンガ」とは誰も想像できまい。
なぜ、この漢字が「モモンガ」なのか――。
どうやら中国のモモンガは、バタバタと大きな音を立てて飛ぶから「田」という漢字が五つもつくらしい。
また、「鬮」と、「口」が九つでひとつの漢字がある。
これは、なんと「耳を覆いたくなるほどうるさい」という意味の漢字であるという。

「口」は声を出す器官であることを考えれば、九人も口が達者なひとがいたら、とってもうるさいに違いない。

それにしても、そんな理由で、「䶵」という漢字が作られたとは。

では、「耳」も八つ、九つ重ねるものがあるかと思えば、残念ながらそうしたものはなく、三つ重ねた「聶」があるだけである。

ところで、我が国では、漢字に似せて、おもしろい「国字（こくじ）」が多く作られた。「畑」や「辻」などは、よく知られたものだが、たとえば「咞」という国字があるのをご存知だろうか。

これは「さそう」と読む。

「行こう！」と「口」で言っているところを表した文字で、つまり「誘って」いるのである。

「咞」や「畑」「辻」など、日本で作られた国字は、なんと千五百以上に及ぶ。

そして、明治時代に作られた国字のなかには、中国に伝わっていまだに中国、台湾で使われているものもある。

また、時代劇などを観ていると、「尾籠（びろう）な奴め」というようなせりふを聞くことがある。当時の「尾籠な」とは、現代の言葉で言えば「ばかな」という意味である。

元禄十一（一六九八）年に書かれた『（和漢音釈）書言字考節用集』という辞書には「尾籠とは、我が国の俗語であるが、その語源は分からない」と記されている。

しかし、「尾」は「お」と読む。また「籠」は「こ」と読む。つまりこの熟語は、「ビロウ」と読まれる前に「ばか」を意味する古語である「お（を）こ」にそれぞれ漢字を当てて作られたものだったのである。

さらに、平安・鎌倉時代の仏教関係の本などを見ていると、不思議な漢字（？）を見ることがある。

たとえば、「メメ」「艹艹」「穴穴」などである。

これは、それぞれ「声聞」「菩薩」「煩悩」を意味する。いずれも、もともとは、頻出する漢字を略して使っていたのが、記号のようになってしまったものなのである。

日本語は、〝遊び〟とともに増殖した。しかし、そこには必ず漢字、そして漢語があった。

漢語とは言うまでもない、「字音で読む語」である。

日本語のおもしろさ、日本語の不思議は、漢語なしには考えられない。

そして、漢字は中国でも同じく、〝遊び〟の基本であり智恵の凝縮であった。

漢字を知ること、それは、中国、日本のみならず、漢字文化圏と呼ばれる東南アジア全

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

体の文化を知ることにもつながっていく。

漢字は、古代の日本にとっては、中国からの借り物の文化であったかもしれない。しかし、漢字は日本語を作るために必要な、きわめて重要なものであった。そして、その文字は日本の古代の人々の心を耕し、思いを伝えるための大切な道具だったのだ。

ただ、現代の私たちが日本語で〝遊ぶ〟ためには、漢字創造の原則を知っておくことが必要であろう。

本書では、そうしたところから、漢字のおもしろさ、漢字の深さを感じるための案内をしたいと思うのである。

目次

はじめに ―― 3

第一章　漢字は千変万化する ―― 11

「漢字」という言葉／「文」と「字」／漢字ができたら鬼が哭いた？／漢方薬からの発見／カクカクの赤い文字／文字は神聖／印鑑のグネグネ文字／竹や木の板に書かれた文字／古代の書物は暗誦するものだった／始皇帝による文字の統一／絹に書かれた書物／偏（ヘン）がつく／紙は漢字の可能性を広げた／書道を習おう／印刷の始まり／文字の霊性／本はみんなにわかる字で／流れ作業で作られた明朝体／科挙が終わってしまう／せめて自分の名前は書こう／漢字の発音／朝鮮半島での漢字の発音／ベトナムでも漢字は使われた／「卓袱」はどこの言葉なのか／漢文は簡単！

第二章　すばらしい漢字のカタチ　65
「六書」という方法／象形／指事／会意／形声／会意形声／仮借／仮借で作られた新しい漢字／転注／もうひとつの転注

第三章　音も変わっていく　87
音節がひとつしかない中国語／アクセントがないとダメ／インドとの遭遇／二字で一字の音を書く／音の種類／韻を踏むから覚えやすい／漢詩は音が美しい／中国語にオノマトペはほとんどないが……／古代人の笑い方／古代音への挑戦／漢字をアルファベットで／古代中国語復元への挑戦

第四章　解釈すれば、あら不思議　113
どのように物をみるのか／思い、邪無し／辟邪という怪獣／「也」「之」は漢字か／布汁大統領／トリゴーと大秦景教流行中国碑／外国語の漢訳

第五章　漢字と日本

日本語が書ける／万葉仮名の借音／「借訓」という方法もある／勧学院の雀／〈カタカナ〉の発明／〈ひらがな〉の発明／まだわからない形の〈かな〉／漢字でない漢字／新しい思想／いろは歌と五十音図の原型／吉備真備と〈カタカナ〉／略字がどんどん作られる／遣唐使船に乗らなかった小野篁／小野篁廬字尽／字割りと詰め字／江戸時代はへんな漢字がいっぱい／漢字はいらない！／漢字は日本語を作る原動力／河・江・川／矢野龍渓という奇才／常用の漢字は三千字以下／語感を磨く教養／単位を表す漢字／戦後の漢字制限／世界に誇る漢和辞典

第一章　漢字は千変万化する

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com